

2015/9/1

しろひげ@Kurobane です。

9 月になりました。

今年も「無礼」だった猛暑もようやく遠のき、季節は律儀に秋へと傾斜し始めました。

樹上の吹奏楽から、草むらの弦楽へ、虫の移ろいは、太陽の季節から「もののあわれ」の季節へと、舞台の巡りを教えてくれています。

ふと見上げれば、そそり立つ入道雲の巨岩が崩れ、白い砂石を散らした空が逝く夏を告げています。

夏が終わって、秋が来た時の、舞台で言えば照明の色調ががらりと変わったような気分を伝えるのは、やはりこの人にかいません。

主よ、季節がまいりました。夏はまことに偉大でした。

日時計のおもてにあなたの影を置いてください。

そうして平野にさわやかな風を立たせてください。

リルケ「秋の日」（『リルケ詩集』 高安国世訳）

私がこの地で医療活動を開始したのもこの 9 月、毎朝 6 時半から患者さんを迎える営みも、早いもので 30 年となりました。

あの日、不安と期待で診療所の玄関を開くと、娘さんと一緒に近所の床屋さんのおかみさんが待っていました。

つまり、診察券の番号が親子で No.1 と No.2 というわけです。

一緒にその日を緊張して迎えたリハビリ担当の男は、「先生、開店の日に女の人が第一号なのは縁起がいいんだって！」と私を力づけてくれました。

母親が同じ床屋を営むその男は、小さい頃からそのような言い伝えを聞いていたのでしょう。

私たちにとっては、幸運の女神であった娘さんも子供を持つ身となり、過ぎた日々の長さ

と早いときの流れを思い知らされます。

朝の早い時間にもかかわらず、私を待っている人がいる限り、私の物語の新しいページはこの月とともにめくられます。

9月は私に懐かしさと、ほのかな決意をうながす月なのです。

黒羽根整形外科
黒羽根洋司